

氏名	坂 田 陽 子
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 3978号
学位授与年月日	平成13年 3 月23日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当者
学 位 論 文 名	認知課題解決における選択的注意の発達過程とその要因に関する研究
論文審査委員	主 査 教 授 金 児 暁 嗣 副主査 教 授 伊 藤 正 人 副主査 教 授 豊 田 ひ さ き

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、認知課題の解決における選択的注意の発達過程と発達要因を、実験的検討を通して解明しようとしたものである。全体として6つの章から成り、9つの実験が報告されている。以下に、各章に即して要旨を概述する。

第1章「序論」では、本研究の位置づけ、本研究での選択的注意の定義、幼児期における選択的注意の発達を扱った先行研究の概観、並びに本研究の問題の所在及び目的と構成が述べられている。

第2章「選択的注意と保存課題遂行との関連性」では、幼児を対象に選択的注意水準の質的差異と保存課題解決との関連性が検討され、2つの実験が行われた。実験1では数の保存課題、実験2では液量の保存課題が用いられ、Piaget型の保存課題と適切情報に注目しやすいように操作を施した保存課題の遂行が比較された。両実験の結果から、数の保存の場合は、選択的注意の質的差異から課題解決の成否を説明できるが、液量の保存の場合はそれだけでは説明できないことが示唆された。しかし、いずれの課題についても、選択的注意水準が質的に高いことが、認知課題解決のための処理の第一歩となると考察された。

第3章「選択的注意と知識との関連性」では、幼児を対象に、課題に含まれる刺激に関する知識の有無と選択的注意との関連性が実験3・5・6によって検討され、知識の有無が選択的注意課題遂行に影響し、知識が注意の制御機能を有すること、そして、知識の有無や知識内容の違いは注意の制御の違いを生むことが示唆された。なお、実験4は選択的注意研究においてコンピュータによる課題呈示の有効性を確かめたものであり、これに基づき実験5以降はコンピュータ装置が利用されている。

第4章「知識の有無と注意の誘導の仕方との関連性」の実験7では、前章で得られた示唆がさらに綿密な実験計画によって吟味され、知識が注意を誘導する働きを担っていること、そして、知識の有無は、注意の適切情報への誘導の仕方の違い、すなわち注意の制御の違いを生むことが実証された。

第5章「概念的関係刺激と知覚的關係刺激間の注意の切り替えコントロール」では、幼児と成人を対象に、同じ領域内での注意の制御と、異なる領域間での注意の制御の質的差異が検討された。まず実験8では、幼児と成人それぞれに解決可能な概念的関係課題と知覚的關係課題の作成が行われた。続いて実験9では、これらの課題を用いて、概念的関係刺激と知覚的關係刺激をひとつの刺激内に同時に競合させて呈示し、被験者が課題要求に応じて、注意を概念的関係もしくは知覚的分類関係に切り替えて適切情報を選択できるかどうか、さらに、異領域間で行われる注意の制御と同領域内のそれとは質的に異なるのかを検討された。その結果、異領域間の注意の制御には意識レベルでの自己制御が必要であり、この制御は4歳から6歳頃にかけて、加齢に伴って発達することが示唆された。

第6章「本研究のまとめ及び総合考察」では、以上の実験により得られた知見が総括され、認知課題解決における選択的注意の発達要因としての注意の制御には、知識をベースとした制御及び自己制御をベー

スとした制御の2種類が存在し、これら2種の注意の制御は、それぞれ別個の発達過程をたどるが、その相互作用によって適切情報へ選択的注意を向けることが可能になってくると結論づけられた。最後に、本研究の結果をもとに、選択的注意についての教育への応用が提言された。

論文審査の結果の要旨

注意とは、入力情報を取捨選択することによって特定の情報がより深く処理されたり、特定の課題遂行や行動がより制御されたかたちで達せられたりする機能をさす。注意機能には、このように選択性という問題が常に含まれている。人間を情報処理システムと仮定する認知心理学の領域では、選択的注意に関する知見が精力的に蓄積されてきた。しかし、知覚で得られた外界刺激がどのように認知へと移行してゆき、知識の獲得に至るのかという問題、さらにはそこに介在する発達心理学的要因についてはほとんど明らかにされてこなかった。本論文はこれらの問題に果敢に挑戦したものである。

以下、各章の論旨の展開に沿って論評を加える。

第1章では、従来の諸説が綿密に比較検討され、それらに通底する発達心理学的問題について論考されている。最新の諸研究への目配りも欲しいところであるが、本章の意義は決して小さくはない。

第2章の2つの実験は、いずれも周到な計画のもとに実施されている。選択的注意は、数の保存課題を解決するための必要十分条件であるが、量の保存課題解決にあたっては必要条件に留まることを示唆した点に本章の意義を見いだすことができる。この章で展開された視点は、子どもの知識や論理操作能力が選択的注意に至らしめるのではないかという以降の章の論述基盤をなしている。

これを承けた第3章の実験3では、概念的関係課題については6歳児のみが達成できることが明らかにされている。ここから、刺激に関する知識の有無が効果的な選択的注意の規定因であるとの示唆を得て、実験5の相関分析的研究が行われ、さらにそれが実験6へと展開される。本章の3つの実験によって、知識の有無と知識内容の違いが課題遂行に影響することが確認されたのみならず、知識が注意の制御機能をも有するという本論文の大きな仮説構築に至る。この斬新な仮説提示は、選択的注意の発達心理学的研究にあらたな地平を開くものと評価される。この仮説検証を目的とした第4章の実験7の結果は、概ね仮説を支持するものであった。

第5章では、より高次な注意の制御機能とその発達過程の解明がめざされる。実験8では、研究目的に即して巧妙に仕組まれた課題作成がなされており、著者の並々ならぬ努力と才知が目される。実験9はこの課題を使用し、意図的な注意の制御とその制御に関わる年齢と発達に関する主張がなされている。

終章において、2種類の注意制御の存在とその発達過程について考察した意義は大きい。しかしながら、教育への応用については具体性に乏しく、やや説得に欠けるのが惜しまれる。

叙上のとおり本論文において得られた知見は高く評価されるが、とくに重要な研究上の意義として、次の2点を挙げることができる。1つは、従来の発達研究では加齢に伴う身体的レベルの制御に関心が集中してきたが、本研究は知的レベルの制御を組み入れ、それがかなりの程度成功していること、もう1つは、従来の選択的注意に関する発達研究では年齢要因が重視されてきた傾向にあるが、本研究は知識要因を統制すれば年齢要因の効果は関係がないことを明らかにしたことである。

総じて、実験計画は周到で論旨の破綻も見られないが、論述にやや科学性を欠く箇所も間々見受けられる。今後著者には、本論文で明らかにされた諸所見をこれまでの認知発達に関する諸理論と対応づけることによって、より普遍的な理論構築をめざすことが期待される。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。